



Title	猿蓑ところどころ
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1954, 13, p. 18-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68466
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

狼蓑ところどころ

小島吉雄

れに従つてをり、幸田露伴氏も太田水穂氏も樋口功氏も結局はこれと同説である。一例として樋口氏の「芭蕉の連句」の説をあげると、

卷之三

表の俳諧の部「市中は」の巻の冒頭に
市中は物のにはひや夏の月

といふのがある。いま問題にしようとする

さす穂に出て」の句意についてであるが七

「豊年の様なり、今一潤ひあらば千金な
い」と、門上三吉は、一利ヨーの百姓家の並

びたる体なり」

のは、猿蓑逆志抄に「炎暑ゆゑ稻穂もすん

のに従つたものの如くである。七部集打聞

「この年よりも暑きに稻のみのりよく
惠二出で、一出也」

と述べている。爾後、大抵の注解者は、こ

ものと考へてゐるために、豊年とか凶年とかいふ思ひつきが生じてくるらしいのである。普通、稻穂の出初めのは、近畿地方を標準にして言へば、八月下旬ごろである。稻の品種によつて出穂期に遅速があるが、出穂期の早い早稻でも八月中旬以前に穂が出るといふことはない。稻はいくら早ばつだらうが、暑気がきびしからうが、大体八月半頃から穂の用意をはじめ、同月下旬に入つて穂が出、九月のはじめ即ち二百十日から二十日頃にかけて花が咲くのであつて、この時期は毎年ほぼ一定してゐる。もちろん、年によつて気候その他の条件によつて出穂期に多少の遅速があるが、半月以上も早くなるといふことはない。だから、炎天のためになんか生長がよくて穂が例年より早く出ると言つたり、早ばつのために早く出ると言つたりしても、それには程度といふものがある。この句の作者去来は京阪の風土を基準にして作句してゐるのであるから、解釈にもこの京阪地方を標準にとつていいのであらうと思ふが、近畿に於ては大体右の如くである。ところが、草取りの時期を固定的なものと考へれば、太田氏の説に従つて仮りに二番草を八月上旬とすれば、稻穂が暑氣のために生育が早くて

八月下旬に出る筈のものが八月上旬にもう出初めたといふことになる。殊に近畿地方では二番草を取る標準時期は七月中旬から下旬にかけてであるから、上記諸註釈書の解釈に従へば、京阪地方では七月中に稻穂が出てしまふことになる。しかし、いくら陽気のためだからと言つても、特別の耕作法を講じない限り、絶対に稻の穂が七月月中旬に出るといふやうなことはあり得ない。これは誠に不都合である。思ふに、かういふ不都合は、草取り時期を固定的なものと考へるところから来るのである。草取りといふものは、元来さういふ性質のものではない。田舎育ちの人は誰れでも存じだらうが、一番草の取りはじめを同時にはじめて、二番草、三番草は、時により家によつて幾分遅速の生じるものである。入手が足りなくて手の廻りかねる時には自然と遅れようし、また雨量が少くて稻田に水の乏しい時には草も多いし、また草取りも出来かねるから、これも亦自然とおくれざるを得ない。また、手がよく廻る時などには、二番草、三番草が例年より速くなることもあります。かういふ風に二番草、三番草等に

「二番草取りも果さず穂に出でて」といふのは、二番草が何かの事情でおくれてゐるところへ、早稻種の稻が穂を出して来たといふ情態であらう。すなはち、「人手が足りないか、或は家庭に何か事故があつて、草取りが手おくれて、なかなか耕作地全部に行きわたりかねる。それで他家ではもう三番草も終り、四番草の塗り込みも終つて、まだ二番草を終つて二番草の最中である。そしてその二番草もまだ取り切つてゐないのに、ばつばつ穂の出で来た田も見えて来た」といふので、追はれるやうな燒しい気分で、せかくと忙しがつてゐる農家のさまである。前句の暑し暑しと門々の声といふのに、晩夏農村の氣趣を見付けて、この付句となつたと見るべきであらう。穂の出る頃になると、稻の成熟に損害を与へるといふので稻田へはひることを避けるのが農家の常である。だから、穂の出るまでに草取りがいくら遅れたとしても、八月下旬の出穂期近くまでおくれるといふことは一寸

あり得ない事である。そこで天氣つづきだと、日照度が高くて稲の生長を早め、出穂を幾らか早めることもあり、また

稲品種は出穂期が早いから、この句は草取りがおくれてある上に早生種で日照度よく穂の出も例年より早く出たといふことに、しないと辻褄があはぬことになる。それにしても、なほ草取りのおくれたが度には

づれてをり、また穂の出がよほど早くなければならぬ。しかし、前にもいつた如く、穂の出が幾ら早くなつたところで、一週間以上も早くなることはないから、この句には幾分誇張があると見るべきである。要は、農家の氣ぜはしげにしてゐる氣趣をあらはすのが主眼であり、その氣趣をかういふ誇張を以つて言ひあらはしたと言へるだらう。

20

受け、その忙しげな情景を「灰うちたたく一枚のうるめ」にクローズアップして來たところも旨い。

—昭和十四年八月二十四日といふ執筆日附のあるこの文の初稿には、右の文のあとに更に次の如き文が附加せられてゐる。すなわち、—

さて、わたくしは、以上のことと学校で学生諸君に話して来て、その夕べである。いつもの如くビールの小瓶を傾けながら、些か得意氣にこの話を山妻にすると、山妻は、わたくしの出鼻を挫くが如く、かういふのである。

「それは旱りですよ。旱りで田に水がなくて草取りが思ふやうに出来ず、そのため次付句「灰うちたたくうるめ一枚」が生きてくるのである。金網などを用ひ、火の上に直接うめを載せて焼いたので、灰がついてある。それで、そのうめを手もしくは火鉢の縁などで叩いて灰を落す仕草を大映しにしたのがこの付句である。前句の「取りも果さず」と言つたところが、

なるほど、この解釈はよいと思つた。水不足といふことにすると、脇句の「暑し暑し」も非常によく照應するのである。そして、実際水不足のために草取りが出来かねると如何にも田草取りの実情に適合してゐて実に妙手であると思ふが、その嬉しい氣趣を

は文学的な素養も知識も少しもないのだが、るまい。

根が百姓の娘だから、かういふことになる。この夏休みに所用あつて帰省したら、現に今年は雨が少なくて田に水が無く、草取りが出来ぬと言つて老父達は弱つてゐる。そして、少しでも水氣のある田は、その干上らぬうちにと急ぎに急いで人手を増して草取りをしてゐるのである。まだ一番草が廻りかねてゐるといふ話であつた。かういふ実際を目のあたりにすると、山妻の説は愈よろしきやうに思はれるのである。それで、わたくしは夕涼みながら、家父にその話を持ち出すと、家父は最初はわたくしの話を話を下した。更に妻の意見を話すと、さういふ風にも考へられるともいふのである。結局、百姓としての立場から、両方どちらの解釈も成り立つといふのである。家庭的事情や人手不足による草取りの遅延とも、また旱天ゆゑの草取りのおくれとも、どちらにでも考へられるといふのである。尤も、今年のやうに旱りもひどいになると、稻もこの句のように悠長に穂にも出でて来ないから、この句の場合には、日照り続いで草取り時分にだけ水不足だつたといふやうな事情にしておかねばな

——以上が、初稿の文である。さうする
と、この「二番草」の句は、草取りのおく
れた理由として「二つの解釈が可能であり、
そのどちらにとつても差支へないことにな
る。要は、穂が出ると田にはひれなくなる
から、草取りを怠ぐ農家の懶しさをこの句
から感得すればよろしいのである。稻のみ
のりに重点をおいてゐる従来の注解は捨つ
べきである。

のであるから、普通ならば「かすれて」でなければならぬ。このことは既に先輩の指摘せられるところであるが、この弱点を補強するために、曉臺や幸田露伴氏などの方言説が生じるのである。すなわち、かすれてというべき場合に、かすりてといふのは伊賀伊勢の方言である。故に油の尽きる場合は芭蕉はこのやうに表現したのだといふのである。果して「かすりて」は伊賀方言であるかどうか、まだよく調査してゐないが、たとへ伊賀方言であるとして、この

れば如何なる場合でも然るといふのではない。「る」「らる」の接尾辞の添加せられた場合に限るのである。「横はる」といふべきを「横たふ」といふが如きこれである。だから、「かすりて」の場合にはこの芭蕉の語法癖は当てはまらないのである。

曾て、藤井紫影先生の説に、かすりは僕約することで、先生の御郷里たる淡路では今もさういふ風に用ゐるといふことであつた。西北鶴太郎氏の説だつたかと思ふが、和歌山県の方でもさういふ用法があるとい

場合芭蕉がわざわざ一般語でない伊賀方言を使用して連衆の理解困難を将来するほど心無さを敢へてするといふことが呑み込めぬ。」この「かすりて」の語は他の連衆にも即座に理解出来る一般通用語だつたと云ふに易い。つまり耳で「かすりて」をよく聞く。

ふことである。元祖頃の通用語に、かすりを縦約の意味に使ふといふことなれば、この句の意味は実に簡単明瞭であるが、わたしは、なほこの方言説を無条件で信じ得ないである。

いふ立場からみて解釈すべきではないか」とすると、やはりその語法が問題になる。生の二重三重の兎は一往も頃十ニシニ。

また糸原退藏の説では一人の事をは三郎兵衛といふべきを三郎、五郎左衛門を五

の「油かすりで」については、詰説あつて一定しない。「かする」といふ言葉の意味が明確でないのである。既に七部婆心録には、「かするといふのはかすり取るの義で、燈し残りを油皿から油差しにかすり入れるのである」といひ、燈し残りを油差しに移すのは節約のためであるとするのである。更にまた逆志抄は「かするは油の意で、油

しも立場からいへば無理すへきてはしないか
とすると、やはりその語法が問題になる。
従つて逆義抄の説は一往お預けとしたい。
ところで、芭蕉は自動詞的に言ふべきところを他動詞でいふ語法上の辭がある。たと

また氣庭追蔵田の説では、一人の事を、三郎兵衛といふべきを三郎、五郎左衛門を五郎などかすりていふ（好色堪忍袋巻三）とあつて、簡略にすることを「かする」といふから、由をかするより、つまり由を約束す

の自然と減つて無くなること」だといふのである。この二説が二代表となつて諸説との何れかに荷担するのである。しかし、逆志抄のいふやうに涸の意味ならば、これは自動詞で「油」が「かかる」の主語となる

へば、「伝はる」といふべきを「伝ふ」といひ、「改まる」を「改む」といふが如きを「かすりて」もまたその例に洩れない」と説くものがある。いかにも芭蕉にはそのやうな語法上の癖があるけれども、そ

「極月廿六夜の月まだ出ぬ
深夜業に、か
来ない。」
今様廿四孝卷四に
(評釈江戸文芸叢書
の俳諧名作集) しかし、この説にも裏腹出
来ない。

二
油かすりて

「きりきりす」の巻の脇を
油かすりで膏薬する次

ないと説くものがある。いかにも芭蕉にはそのやうな語法上の癖があるけれども、そ

今様廿四孝卷四に
「極月廿六夜の月まだ出ぬ深夜業に、か

すりし油たちしまひ、はつとして消ゆる

づら

「米びつの底かすらぬやう」のかすりてと

燈火」

ふるあがり、茶がまをかする酒の酔

の同意であり、今様廿四孝の「かすりし油」

とある。この文はかつてわたくしも発見し

「釜かする」の美濃の書長

の場合と同じ語意なのであらう。

て教室で話したことがあつたが、顕原氏も「かする」の用例の第一番にこれをあげて

等、いづれも、「かすりし油」のカスルと同義にとつて少しも差支へがないやうである。酒の酔に湯茶を節約するでは通じない

「これは油入の底までかすつて油皿にいだ意であらう」と述べてをられる。この「か

すりし油」は、どう考へてもそのやうに解するより外に考へやうのないものである。器物の底に少量しか残つてゐないものを杓子等ですつかりかすり取るに、何々をかするといふは、今もいふことであつて、例へば、「湯をかする」「釜の飯をかする」などといふのは、釜底にある湯とか飯とかを杓子でかすり取ることを意味してゐるのである。この油をかするといふのも、同様の言ひ方である。その釜底からかすり取つた湯や

酒の酔が生きてくるのである。顕原氏が最後にあげてある好色囂忍袋の「五郎左衛門

を五郎などかすりていふ」の「かする」と油かするや茶釜をかするの「かする」とはそ

の用法意味が全く別種なのである。語原的にはどういふことになるのか知らぬが、具

体的には、堪忍袋にいふかするは掠の義である。油などの場合は器物の底をカサカサ鳴らして底溜を搔き出す動作をいふのである。杉浦正一郎氏の「新註猿蓑」の補註に、

用例としてあげてをられる「米びつの底かすらぬやうに致せ」といふ芭蕉の手紙文も

節約の意味ではなく、米びつに米を無くさぬやうにせよといふ意味と解すべく、「五

郎などかすりていふ」のかするとは違ふの

うに思はれる。たとへば、前にあげた、「

半両の油かするやもろかづらぬやうに致せ

茶がまをかする酒の酔

など、「かする」には、かする動作と共に

米びつの底をかすらぬやうに致せ

たとへば、

賀茂祭 半両の油かするや、ものか

である。蓋し、芭蕉の「油かすりて」は

の句の場合も、やはりさういふ意味のかすりで、かすつたけれども燈火をともしつづけるだけの油の無かつたことを意味してゐる。わたくしのこの句の解は、結局次のやうになる。

「秋の長夜、夜なべでもしようと思つてゐる」と行燈の油が切れたやうである。油を差さうとして油壺を取り出しだが、それにもしない。かすつてみたけれども「零ほどしかない。今さら油を買ひにゆくのも億劫だから、えゝまゝよとそのまま宵寝してしまふのである。」

婆心録は、「秋中油をきらすことあらむや」と言つて、かやうな解釈を排斥してゐるが、まだ油があると思つてゐたのに、さてもう切れてゐたといふやうなことは、實際の日常生活としてはしばしばあることで、婆心録の考へは寧ろ偏狹である。もちろん、この句を油をきらした体と解する説も昔から時々見えるのであって、波鷗の七部集講義にも、「附意は発句灰汁桶の零やみてきりぎりす鳴くを賤家と見立て油の時へもなきまなるべし」

といつてゐる。

それにつけても憶ひ出すのは、わが少時

まだランプをつけてゐた頃のことである。まだ灰を入れて桶の上にのせ、その灰の上に灰一杯に水を張つておくと、灰汁が笊の目を通つて桶にいたり落ちる仕掛けに、さて、大抵夜の間に灰汁を取つておくのが、のやうになる。

笊に灰を入れて桶の上にのせ、その灰の上から笊一杯に水を張つておくと、灰汁が笊の目を通つて桶にいたり落ちる仕掛けに、笊に灰汁のボタンボタンと滴り落ちるその音にまじつてその桶の蔭に鳴くころぎの物佗びしいとぎれとぎれの声を聞いた秋の夜ごろを「灰汁桶の零やみけりきりぎりす」の句から、さまざまと憶ひ起すのである。そして、中学の時分までつけてゐたランプの、石油が切れて火の消えはそるゝと、それにも油がなくなつていて而もわざわざ石油壺を開けて石油を出しにゆくのも億劫で、明日の予習をも中止してそのまま宵寝してしまつたことなどを、また「油かすりて」の脇句から聯想するのである。

氣らくな、そして幾分無精な、超俗的な生氣分が溢れてゐることを認めるべきである。

氣らくな、そして幾分無精な、超俗的な生氣分が溢れてゐることを認めるべきである。

因みに云ふ。

婆心録に油皿より油壺に残

して、大抵夜の間に灰汁を取りつておくのが、から笊一杯に水を張つておくと、灰汁が笊の目を通つて桶にいたり落ちる仕掛けに、笊に灰汁のボタンボタンと滴り落ちるその音にまじつてその桶の蔭に鳴くころぎの物佗びしいとぎれとぎれの声を聞いた秋の夜ごろを「灰汁桶の零やみけりきりぎりす」の句から、さまざまと憶ひ起すのである。そして、中学の時分までつけてゐたランプの、石油が切れて火の消えはそるゝと、それにも油がなくなつていて而もわざわざ石油壺を開けて石油を出しにゆくのも億劫で、明日の予習をも中止してそのまま宵寝してしまつたことなどを、また「油かすりて」の脇句から聯想するのである。

つた方により濃厚である。

—大阪大学教授—